

つて居る。東京と横濱は非常に多くなつて居る。東京や横濱では百人の中七十三人の蟲齒の者があるのに、宮城縣と秋田縣では僅に三十人位である。

之を要するに、齒牙口腔の衛生について、はまた世間であまり注意せられて居らぬのは事實である。故に之れから一つ注意して齒を健全ならしむるに つとめたいのであります。楊枝は、あまり、やはらかすぎぬものを、朝夕必ず二回は使用する事、また食後は必ず含嗽する事、楊枝は使用後必ず乾燥せしむる事、是等の點に注意して置きたいのであります。

英文學にあらはれたる子供 (三)

『ジエーン、アイア』(三)

赤部室レッドルームといふのは明部室で、此家に御客でも澤山あつて、家中の部室が皆入用だといふ場合でな

ロッヂヤンといふ社會學者が「歐洲の文明が口中に迄及べるは唯上流社會のみ、中流社會は未し」とはいふて居りますが、日本では上流社會もどうでありませうか。却て上流の子弟に禹齒の多い事實を私は一度調べたことがあります。

小學校幼稚園などで、兒童の時分から、他のいづれの點にも注意しておもらいすると同時に、齒の衛生につきても、よく注意して置きたいと願ひするのであります。

附記本篇は學友丸茂學士の論文に負ふ所大なり記して謝意を表す。

岡田みつ

くては人が此處へ寝る事はないのである。尤部室としては、家中で一番大きな立流なので中央に御

宮のやうに据ゑてある寢臺には、頑丈な桃花心木の四本柱があつて深紅の緞子の帳が垂れてゐる。平常カーテンの下りてゐる二つの窓には同じ緞子の幔が花綵形に絞つてあつて其の半を隠してゐる。敷物も赤いし、寢臺の下手にあるテーブルにも赤の被ひが掛けてあり、壁も幾分赤味を帯びた薄白茶色で衣裳簞笥と化粧臺と椅子とは黒光りする桃花心木である。而してこの小暗い色の中で、ベッドの上に蒲團や枕や掛蒲團がくつきり白く高く見える。其れに今一つ目立つのはベッドの上手にある布團付きの安樂椅子で（之が亦白い）其前に足臺のある工合は、帝王の玉座とも見えた。

此部屋は火の氣のある例がないので、底冷がするし、子供部屋や臺所から遠いので森としてゐるし、人の出入がないので凄愴の氣が充ちてゐた。土曜日ごとに女中が来て一週日の塵埃を、鏡の面だの器具の上から掃つて行くのと、時折リード夫人が衣裳簞笥の隠し抽出しに仕舞つてある書類

だの、寶石箱だの、死没つた良人の小畫像を見に来る位であつた。赤部屋が立派なものにも似ず、人氣なく陰氣な理由は、この「死没つた良人」といふ語で説明せられるのである。リード君が没してから九年になるのであるが此人が息を引取つたのが此室で、棺に納まつてゐたのも亦此處で、葬儀屋の人夫が此處から棺を昇ぎ出して以來この室は尊いやうな恐ろしいやうな感を與へるので、つひ人の出入りも少なくなつたのである。

ベシーとアポットがジエーンを押据ゑて行つた座席は大理石の爐飾りの近くの大榻であつた。例の寢臺が鼻先にあつて、左手が幔の被ひかぶさつた窓、右手が高い黒つばい簞笥で、物の影がちぎれ／＼に荘とそれに映るので、光澤のよい木材が光彩立つて見えた。而して窓と簞笥の中程にある大きな鏡には、がらんとした部屋と、寢臺とが映つて居た。ジエーンは室の手に鏡が下りてゐるかどうか分らなかつたので、思ひ切つて立ち上つて

見にいつて。嗚呼、之程嚴重な牢獄はまたとある

まいと思はれた。元の席へ戻るには、勢ひ、鏡の前を横切らなくてはならなかつたので、我知らずそれを見る拍子に、ジェーンは引つけられるやうに其れに見入つて終つた。鏡に映るかぎりのものは實物よりも尙冷やかに、尙陰氣に見え、而してジェーンを見詰めてゐる鏡中の少女の姿は——顔と腕とが暗黒の中に白く浮いて、怖氣立つて目ばかりが、この寂寞の境にひとり動いた——此世のものとは見えなかつた。ジェーンは之を見て、廣野の中の、羊齒の茂つた淋しい谷間から、日の暮方に、家路を急ぐ旅人の目前に出て來ると、ベシの御伽話に聞いた仙女とも悪鬼ともつかぬ一種の妖怪ではないかと考へながら、腰掛へ戻つた。

迷信物怖ぢの念は此時既にジェーンの心に宿つて居たのだが、その血はまだ煮え立ち、反抗の氣分が未だ勢を占めてゐたので、此處までに立ち至つた事の顛末を回想するのに急で、今の物凄さに思

ひ至る暇がなかつたのである。

デヨンの非道、その姉妹の冷淡、伯母の嫌厭、女中共の偏頗が、かき亂した井戸に沈澱物が舞ひ上るやうに、ジェーンの亂れた心も浮き上つた。何故、自分は年中苦しい思ひをし、年中嚇し付けられ、始終非難され、始終罪に陥れられるのだらう。何故人の氣に入らぬのだらう。可愛がられやうと努めても、何故無効なのだらう、強情で吾儘なのに、大切にされるし、デヨーデアナは氣隨で手ひどく人を虐遇て、擧足取りの横柄屋なのに、皆に甘やかされてゐる。その金髪紅顔の美兒が、見る人の心を和げて、あらゆる缺點をも償ふらしい。デヨンと來たら、鳩の首を扭ぢやうが、孔雀の雛を殺さうが、羊に犬を啖けやうが温室の樹から果實を取り盡さうが、貴重の花弁を手折ろうが誰一人逆らふものもなければ、ましてや之を罰しやうとするものはない。デヨンは母親の事を「婆さん」と呼び、自分のに似てゐるその牙えぬ顔色

を罵り、その言ふ事にか全然耳にも入れず、その絹の衣裳を裂いたり損じたりするのは、一向に珍らしくない。それでもやはり母親の目には、大事な愛兒なのである。自分は、到底故意になど悪い事を爲得ないし、言ひ付けられた事は、氣を揉んで果さうとしてゐるのに、朝から晝まで、晝から夜まで、腕白で五月蠅くて澁面作りで、卑屈者だと言はれる。

ジエーンの頭は、打たれたのと、仆れたのとで痛んで未だ出血が止まらなかつた。ヂヨンが妄りに人を打つたからとて、それを叱るものではなく、正當防衛をした自分は、却て家内中の凌辱を荷つてゐるのである。

「實に理不盡だ」とジエーンの理性は叫んだ。苦痛に刺激されて、一時ながらも、大人びた極度に進んだ理智がさそくに決心をして、逃亡するとも飲食を絶つて餓死するとしても、こんな堪へがたい壓迫から免れ出る工夫をせよ」と唆するの

であつた。此淋しい半日間のジエーンの精神は、動亂の状態で胸中には暴動が起り、頭腦の中は捲られるやうであつた！

日の光がもう赤部屋に入らなくなつた。四時過ぎたので、曇つた午後の半日が、陰氣な黄昏にかはり行くところであつた。階下の窓に、引切りなしに衝る雨滴の音、裏の林を騒がせてゐる風の吼りが耳に入つてジエーンは、次第に石のやうに身が冷えて行くのを覺え、元氣も頓に衰へて終つた。屈辱に甘んじ、自らを疑ふといふ、意氣銷沈した平常の氣分が出て、燃え盡きかけてゐた忿怒の餘燼を消し去つてしまつた。家内中のものが、自分を悪いといふから若しかしたら、其が眞實なのかも知れない。餓ゑて死なうなどと今も今思つてゐたが夫こそ罪惡だ！自分は今死に得る身の上か知らむ。ゲートベッド寺院の内陣の後ろにある墓穴は、安らかに眠るのに宜い處か知らむ。伯父さんは、その穴に葬つてあると聞いたが……とジエー

シは此考に釣られて、こんどは伯父さんそのものを思ひ浮べやうと、しかもく恐がりく考へた。

その顔は、覺えはないが「ジエンの實の伯父で、母の兄弟であつた。なんでも親を失つた赤子のジエンを引取つてくれて、臨終の際には、ジエンを我子と思つて養育してくれと妻に頼んで、誓言までさせたのである。リード夫人は、その誓言を實行してゐると、自からは思つて居るのであらう又實際あの氣質では、あれで出来るだけ盡してゐるのであらうが、自分に血縁のない邪魔者を、如何して心から愛する氣になれやう。虫の好かぬ他人の子に、親となつてやるとの無理強の誓に縛られて、好ましくもない無縁のものに、年中、家族團欒の邪魔をされてゐるのは、どのやうにか厭はしい事であらう。

不圖妙な念がジエンの心に浮んだ。伯父さんが生きて居られたら、自分に優しくして下さるだらうにとは、常に信じてゐるのだが、今かうやつ

て、白い臥床と暗い壁に對つて坐つて、幽かに光る鏡の面を時々熟つと見入りながら思つたのは死んだ人が臨終いまわの際の遺言が守られないのを苦に病んで、浮世に迷ひ出て、背言した者を責め、腦める者を救ふ例たふしがあるとの事で、若し伯父さんも、妹の子が虐待されてゐるのが迷になつて、冥府からだか、寺院の墓穴からだか、抜け出て、此處へ來はしまいかと考へた。ジエンは涙を拭き泣聲を止めて終つた。自分が悲歎に暮れてゐる様を見て、伯父さんが氣味の悪い聲で、藉慰すかしてもして下さつたら、暗の中から御光の射す顔を、自分の傍へすり寄せでもなさりはせぬかしら、理屈の上では結構な嬉しい事だが、之が實際となつたら、嘸恐ろしかろうに、そんな事を考へまいと、ジエンは一生懸命に、氣を確しつりさせやうと、眼に掛る髪の毛を振り拂ひ、首を舉げて、暗い部室の中を思ひ切つて見廻すやうにした。その途端に、一道の光りが壁を照した。窓掛の隙間から洩れる月光か

とも考へたが、否々月光は動く筈はないのに、今のは動いたのである。見る間にその光りは天井へ迂りよつて、ジエーンの頭の上で揺らめいてゐた。後年になつて考へれば、大方提灯を下げた人が、夜を通つたのたろう位は、直に考が付くのであるが、其時は心が恐ろしいものを期待してゐたのと、神経が興奮してゐたのとで、その閃めく光りを亡靈の先觸だと推したのである。ジエーンの胸は早鐘を撞き、頭腦は熱して來た。サワ／＼耳に聞こえるのはその先解の翼の動く音かも知れぬ。アレ／＼何物だか近よつて來た。ア、苦しい息が塞りさうだ！ 辛抱の綱も切れ果て、ジエーンは戸口へ走り寄り、夢我夢中に戸をこち開けやうとした。すると、足音が廊下に聞え、鍵を動かす音がしてベシーとアポットが入つて來た。

「ジエーンさん。氣分が御悪いの」とベシーが言つた。

「何といふひどい音なんです！ 身體中へ響き渡

りましたよ」とアポットは怒鳴つた。

「出して御くれ。子供部屋へ連れていつて！」とジエーンは泣き叫んだ。

「何故ですの。痛いところでもあるのですか。何か出來ましたか」と再びベシーは訊ねた。

「あ、光るものが見えた！ 御化けが來るかと思つた」といつてジエーンはベシーの手を捉へた。しかもベシーは振り放しもしなかつた。

「態と大聲を擧げたのですよ」とアポットは悪々しさうに言つて「その聲といつたらありはしない！ 眞實に痛いと言ふのなら無理もないけれど、人に來てもらはうと思つてしたのさ。御定りの悪計だ」

「一體何事なのだへ」と横柄に誰か言つたと思つたら、リード夫人が帽子も跳ね飛びさうに、裾さばきも荒らかに廊下をやつて來た。

「アポットもベシーも言ひ付けて於いたじやないか。ジエーンは私が行く迄赤部屋へ入れて置く

のだと」

「ジェーンさんが餘り大きな聲をお出しなさいましたから」とベシーが取做した。

「打棄つて御置き。これベシーの手をお放しなさいそんな事をして此處から出やうたつて駄目ですよ。つまらぬ小細工を、子供がすると一層悪らしい。悪計は何の役にも立たないものだといふ事を教へて上げる。之から、もう一時間此處に御いでなさい。ほんとに穩順しく靜かにしてゐたらその時に勸忍して上るから」

「伯母さん。何卒勸忍して下さいませ。到底辛抱が出来ません。他にどんな風にでも罰して下さい。此處では死んでしまい……」

「御黙り！ 應感情が強くて實に厭になつてしまふ」

リード夫人は、實際厭であつたに相違ない。

伯母の目には、ジェーンは、芝居上手で、ひどい疍癩持の、卑劣な根性の、恐ろしい表裏のある子

供と見えたのである。

ベシーとアボットとの立ち去つてから後、夫人はジェーンの狂氣じみた苦悶と獻敵に、むしやくしや腹を立て、つとこの小女を室の中へ押しやつて、一言半句の言もなく、戸に錠を下ろした。ジェーンはスートと遠ざかる裾の音を聞いたが、伯母が去つてから一時、卒倒でもしたものと見えその餘の事は全く知覺がなかつた。

